

論文の内容の要旨

論文題目 女性労働者から女性労働者へ

—19世紀半ばイギリスにおける女性労働者の自己認識について—

氏 名 KIM Hyeseung (金 慧昇)

本研究の目的は、女性の労働市場と家庭における経験を中心に、19世紀半ばのイギリスにおいて女性の労働者としてのアイデンティティと妻・母親としてのアイデンティティがいかに形成されていったかを明らかにすることである。そして、さらに、賃金労働と家事労働を中心とする女性労働者の経験が、階級を超えた女性同士のものになっていくことで、女性の間に共通の認識が形成されていったことも検討する。本稿が対象としていた1830年代から1860年代にかけて、イギリスの女性労働者は、自らを女性労働者というより、女性労働者として認識していったのであり、そのような認識は、階級を問わず女性の共通のものになっていった。当時女性たちは、特に1830年代以降、労働市場に本格的に参加しはじめ、労働者階級の政治・労働運動の一部をなしながら、労働者としてのアイデンティティを形成していった。しかし、一方で、女性の「家庭性」を強調する言説は、女性に家庭における義務である家事労働を遂行することを求め、女性労働者の妻・母親としてのアイデンティティを強化していった。労働市場と家庭の間の選択を迫られるという問題に直面していた労働者階級女性の経験は、次第に中産階級女性にとっても共通のものになっていく。そこで、「女性雇用促進協会(以下、SPEW)」と「女性衛生協会(以下、LSA)」は、女性の賃金労働と家事労働を中心とした共通の認識を通じて、女性同士の連帯意識形成の基盤をなしていく。

本論の第1章では、「労働組合大連合」とチャーティスト運動、工場改革運動を通じて、女性労働者のアイデンティティ形成を労働者として、そして妻・母親としてという両面から検討する。1830-50年代のイギリスでは、綿工業を中心に女性たちが労働市場に流入されていった。賃金労働者として女性たちは、自らの労働条件を改善するための労働運動に積極的に参加していた。1830年代の「労働組合大連合」の形成や、ストライキなどの労働運動、チャーティスト運動のような労働者階級の抵抗文化の一部であった女性たちは、その中で労働者としてのアイデンティティを形成していった。しかし、当時の性別分業と男性稼ぎ主イデオロギーは他方で女性労働者のアイデンティティに影響を及ぼしており、1830-50年代のチャーティスト運動と工場改革運動は、労働者階級の間に女性の「家庭性」を重視する認識を普及する役割を果たしていた。両運動で提示された労働者階級の理想は、男性労働者が公的領域である労働市場で家族を扶養できる十分な賃金を得ることで、女性を育児・家事の専担者として私的領域である家庭に留めることを可能にすることであった。そのような理想は、1840年代の工場法に反映され、労働市場における女性の地位は男性の地位と区別されるものとして規定された。そのため、女性の労働市場進出の増加という現実と、男性労働者を中心として描かれた労働者階級の

理想の間には乖離が生じ、特に既婚女性の賃金労働に対する否定的な認識が形成されるようになった。それにも関わらず、女性たちが労働者としてのアイデンティティを完全に放棄することはなかった。女性の「家庭性」を重視する当時の認識と法規定は、その後の女性の賃金労働と家庭に対する認識に影響していった。

第2章は、女性の賃労働者としての、そして妻・母親としての認識が区分されていたことが具体的に観察される1853年のプレストン・ストライキの事例を検討する。ここでは、1853年のストライキにおける女性労働者の役割を、積極的な参加者として再評価する一方、ストライキの重要な一部であったにも関わらず、女性自らが既婚女性の労働市場からの撤退を要求するようになった背景を分析する。かつてのプレストン・ストライキ研究においては、争議における女性の活動についてまだ十分な検討がなされてこなかった。そこで、第2章では、ストライキにおいて女性労働者が、操業中断、労働者会議への参加、寄付金募金、スト破り行為の阻止などを通じて重要な支持者として参加していたことを具体的に検討する。そして、そのように活発に活動していた女性労働者自身が、既婚女性の工場からの撤退を要求するようになったのは、1830年代からのチャーティスト運動と工場改革運動により形成された、女性の、特に既婚女性の賃労働を問題視し、既婚女性の家庭における義務を強調する言説の影響であったことも明らかにする。当時女性労働者は、1) 労働供給の制限による(特に男性労働者の)賃金上昇、2) 既婚女性労働者の賃労働、家事・育児の二重負担の軽減、3) 独身女性労働者の経済的自立の維持、を期待し、既婚女性の工場労働に反対の意見を示していたと考えられる。このような要求は、自らを結婚前後に分けて考える二重的な認識を表すものであり、そのような認識の二重性は、男性稼ぎ主と家族賃金イデオロギーを求めている労働者階級の理想像と、女性の、特に独身女性の賃労働なしには維持できないイギリス社会の現実との乖離の産物であったと考えられる。このように、当時女性労働者が直面していた女性労働自体への反対と、それにも関わらず重要な支持者として労働運動に参加していた経験は、その後の女性労働運動を理解するための前史として捉えることができるのである。

第3章では、早くから労働者階級女性が労働市場と家庭の間で直面していた問題を、1850年代以降には中産階級女性も同様に経験するようになったことをSPEWとLSAの活動を中心に検討する。両協会は、進歩的で改革的な中間階級女性の集まりであった「ランガム・プレイス・グループ(以下、LPG)」によって設立され、社会問題を議論する「全国社会科学振興協会(以下、NAPSS)」と連係して活動を行っていた。LPGの女性たちは、一方ではSPEWを通じて女性の賃金労働の必要性和重要性を力説しながら、他方ではLSAを通じて女性の家事労働の重要性も強調していった。両協会は、慈善活動の性格を持ちながらも、単なる慈善団体としてではなく、階級を超えて女性同士の交流の機会を提供し、そこで女性たちは労働市場と家庭を中心として女性同士の共通の認識を形成していった。

第3章の第2節では、SPEWが女性の雇用機会の拡大と労働市場における女性の地位改善のために活動をしていた点を検討する。SPEWは、過剰な女性人口という問題から、女性の賃金労働の必要性に気づき、女性の労働市場への進出を促進するための活動を行っていた。そのためにSPEWは、雇用登録の導入や教育・職業訓練の提供を通じて実質的に女性の雇用を促しながら、女性の職種に対する社

会の認識を改善するための努力もしていった。しかし、**SPEW**の当初の目的は、結婚を職業として持つことができない女性の経済的な自立を支援することであり、女性の職業としても、しばしば「女性性」を保持することができる職種が提案されていた。また、当時の性別領域分離と性別分業の文化は女性の結婚を当然視しており、**SPEW**においても、女性の召命は家庭にあり、既婚女性の賃金労働はふさわしくないという認識が示されていた。**SPEW**の活動を通じて女性たちは、労働市場における女性の低い地位という問題、さらには女性に期待された「女性性」と「家庭性」の問題について、階級を超える共通の認識を共有するようになったのである。

第3節では、労働者家庭の衛生改善という問題において、女性の家庭における義務がさらに強調されていくことを、**LSA**の活動を通じて検討する。**LSA**は、**NAPSS**と連係し、全国に地域支部を設け、出版物の刊行や衛生知識に関する講義・講演会の開催、家庭訪問活動、裁縫や料理教室の開講などの活動を行っていた。これらの活動は、一方では、女性の組織化と女性同士の認識の共有という側面でネットワークを拡張するような性格を、他方では、中産階級女性に内面化されていた性別分業イデオロギーが労働者階級女性に普及・強化されるような性格を持っていた。そこで**LSA**が特に重要視していたのは、各家庭の衛生水準を向上するための女性の役割であった。**LSA**はそのために、個別の女性労働者に衛生知識を伝えており、そのような活動を通じて、階級を超えた女性たちの交流の機会が拡大していった。つまり、**LSA**の活動によって、女性運動の基盤となる女性間のネットワークが広がっていった一方、女性運動の障害となる家父長制の性別分業のイデオロギーも広がっていったのである。

SPEWと**LSA**の活動を通じて女性の間に共有されていった共通の認識というのは、中産階級女性にとっては、女性の賃金労働の必要性和、労働市場における女性の地位の問題を認識することで、労働者階級女性にとっては、女性としての家庭内の義務を具体的に付与されることで、形成されたのであった。かくして、限られた時間という制約の下で、賃金労働と家事労働の間の選択を迫られていた当時の女性労働者の経験は、階級を超えた女性同士の共通のものとして拡張されていった。当時、女性たちが労働市場と家庭において抱えている問題について共感しあっていたことで、女性たちの間には相互理解に基づく共通の認識が形成されていったのである。そして、そのような共通の認識に基づいて形成された「姉妹愛」は、1870年代以降の女性解放運動を理解する重要な手がかりとなるのであり、1870年代以前において「姉妹愛」の形成の中心となったのが**LPG**であった。**LPG**が設立した**SPEW**と**LSA**の活動を通じて、労働市場においては労働者として、家庭においては女性としての経験を共有していった女性たちは、それに基づく共通の認識に基づく連帯を形成し、1870年代以降は、女性の社会的地位を改善するための女性運動を本格化していった。